

13. 金剛院城跡

こんごういんじょうあと

所在地：越前市深草二丁目

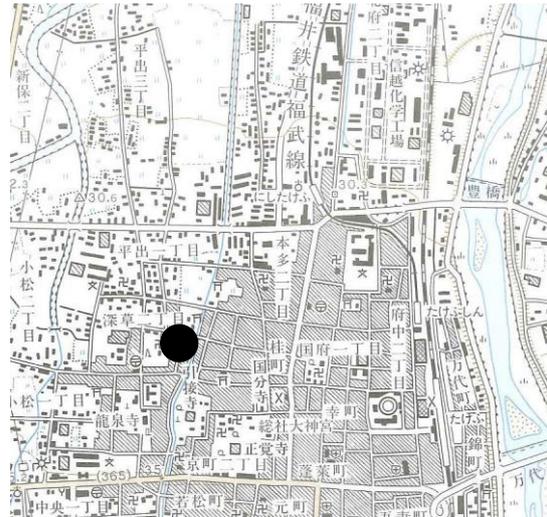
調査原因：市道敷設工事

調査期間：平成30年3月19日～5月1日

調査主体：越前市教育委員会

調査面積：271 m²

時代：古代～近世



位置図 (S=1/25,000)

調査の概要 調査地は周知の埋蔵文化財包蔵地の「金剛院城跡」の範囲に含まれる場所です。当該地は元々、慧日山金剛院に隣接する住宅地となっていました。平成28年度、平成29年度に市道敷設工事に伴う試掘調査を実施したところ、道路敷設予定範囲の一部において遺構、遺物が発見されたため、本調査を行うこととなりました。

遺構 主な遺構として、井戸3基 (SE01～SE03)、溝4条、土坑33基、柱穴を含むピット210基以上を検出しました。

井戸はいずれも調査区の西側に偏って検出しており、北部、中央、南側と並ぶように出土しました。SE01は攪乱面の下から検出しており、中世から近世にかけてのものと考えられます。SE02は近世から近代にかけて、SE03は井戸枠の石材の隙間にモルタル様の材料が付着しており、近代のものと考えられます。

溝のSD04は調査区の南から南北に延びる溝で、南側からは土師器や、須恵器の坏身、坏蓋、高坏等がまとまって出土しました。また、SD04の2層からは中世の陶器片が数点混じっていたことから、SD04は古代から中世にかけての溝と考えられます。調査区の中央を中心に、柱穴と考えられるピットもいくつか検出されました。なかでもSP53、64には根石と思われる礫石が敷かれていましたが、ピットの大きさを見ると約40cm程度の大きさのものでした。また、SP70では遺構内から10cm以上の礫が多数敷き詰められて検出されましたが、出土遺物から近世の遺構と考えられます。

遺物 出土遺物は須恵器、土師器、陶器、磁器、灰釉陶器、古銭、埋甕など、古代から近世にかけての遺物が出土しました。

まとめ 調査区を含む一帯は、正徳元年府中図をみると金剛院の境内となっており、明治八年の武生市街分間図でも金剛院地名子と記されています。これらのことから、当該地は以前から宅地として利用されていたと考えられます。出土した遺構や遺物は、古代から近世にかけてのものですが、主に近世のものが中心でした。

(用田聖実)



調査区全景（北東から）



SD04 検出状況（南から）



SP64 検出状況（東から）



SP7 検出状況（東から）